

福島県 中学校長会 広報

・会長挨拶「中学校教育70年、心新た」……………	1
・学校教育の今日的課題 「中学校教員の働き方を考える」……………	2
・平成29年度県中学校長会の歩みと成果……………	3
・福島県中学校70年史の刊行にあたって……………	3
・専門部会活動の概要(行財政部会・研究部会・ 進路指導部会・生徒指導部会・広報部会)……………	4～6
・小・中学校合同理事会報告、中学校理事会報告……………	6
・第68回全日本中学校長会東京大会……………	7
・支会情報と特色ある経営(安達・田村・両沼・相馬)……………	8～11
・随想「その席で何をしたか」……………	12



平成29年度を振り返って ～中学校教育70年、心新た～

福島県中学校長会長 福地 憲司
(福島市立福島第四中学校)

【中学校教育70年記念全 日本中学校長会東京大会】

昭和22年、「極めて困難な状況下」で始まった中学校教育は、国民の熱意と関係者の努力により多大な成果を上げ、我が国の発展に大きく寄与し70年の歴史を刻んできた。

そのような中、平成23年、中学校教育64年目に発生した東日本大震災及び原発事故は、本県を「再び極めて困難な状況下」に置くこととなった。

この「状況下」は、本県校長に「生き抜く」ことの意味を問うこととなった。子供たちには、非日常的、想定外の事象等の様々な困難に直面しても、諦めることなく、状況を主体的かつ的確に判断し臨機応変に行動する力やコミュニケーション力をつけることが必要なのだとすることをあらためて問い質されたと思えてならない。

そういった意味で、平成28年度からの研究主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」への思いは、本県校長にとって一層重く深いものであった。

節目であった昨年、10月19日、20日に、東京国際フォーラムにおいて、本県からは66名の参加のもと、中学校教育70年記念全日本中学校長会東京大会が開催された。

19日の記念式典には皇太子同妃両殿下のご台臨を賜り、その式典後に急遽、東日本大震災の被災3県(岩手県・宮城県・福島県)の校長会長が別室に召集され、皇太子同妃両殿下よりお言葉をいただくこととなった。ご接見ということではあったが、皇太子同妃両殿下と向かい合わせで約10分間にわたり各県の状況等についてお話をさせていただいた。

福島県(私)

- いつも福島県に対し、温かいお言葉を賜り有難いと思っていること
- 福島県の場合は、原発事故という被災を抱えていること
- 未だ、約3,700人の中学生が、地元を離れての

生活をしていること

- 風評被害と、また一方で風化があること
- 子供たちに「生き抜く力」を付けたいという思いでいること

両殿下には身に余る「いたわり」と「ねぎらい」のお言葉をいただいた。特に、福島県の子供たちが県外の避難先でいじめに遭うということに対しての、「心が痛みます」のお言葉には涙が出てしまった。

【心新た】

今年度、川内村・広野町の小・中学校4校に加え、楡葉町の小・中学校3校が帰還するも、浪江町の小・中学校9校のうち6校が臨時休業中であり、双葉郡内残り5町村の小・中学校15校が未だ避難先での教育活動を行っている。徐々に明るい兆しも見られるようになってきてはいるものの、教育の復興に向けた道のりはまだまだ遠く、依然厳しい状況のままであると言わざるを得ない。

そのような中、様々な状況下にある各学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決という基本方針」の基に、各専門部会を中心としながら充実した活動を展開することができた。

要望活動、調査、研究の深化・拡充、進路指導の積極的な推進、不登校やいじめ・反社会的行動等の解決や未然防止、広報活動の充実、関係団体との連携等々、その実践は知・徳・体のバランスのとれた、社会に貢献する自立した子供たちの育成に大きく寄与するものである。

震災後7年…

両殿下のお言葉を謹受し、心新た…

「学校は復興のシンボルであり、活力源である」ことを再認識し、今後もしっかりと地に足を付けた着実な歩みを進めていかなければならない。

最後に、会員皆様のご尽力により、この1年、着実に歩みを進めることができたことに御礼を申し上げるとともに、今年度末をもってご退職される校長先生方のこれまでのご功績に重ねて感謝申し上げます。

学校教育の今日的課題



—中学校教員の働き方を考える—

福島県中学校長会副会長 飯村 新市
(郡山市立郡山第二中学校)

土曜日が出勤日だった採用当時を思い起こすと、春から秋まで土曜日の午後は普通練習、日曜日は練習試合の予定を立て、一日自分の時間として自由に過ごすことは叶わなかった。週末部活をするのは当たり前の中、多くの中学校教員はこのような週末を過ごしていたと思う。そして毎日部活に明け暮れていたあの当時、疲労は多少あったが多忙感を感じなかったのは、若さだけではなかったと思う。

中学校教員になったからには、「部活顧問をし、土日も生徒と共に汗を流す」これが常道と信じて疑わなかった。生徒指導対応は、部活よりも先に、教材研究は、一日の最後にというのが、私の仕事の流儀であった。

暴力行為、万引き、家出など問題行為の対応には、想像を超える手間と時間がかかった。家出をした女子生徒を探しに隣県まで出かけたり、集団万引きをした生徒を遅くまで指導したりと、これまでに経験した事案は、枚挙にいとまがない。

振り返るに、どれ一つとっても教師として自分の仕事ではないと割り切れるものはない。しかし、学校に居る時間は、若かったときも現在もあまり変わらない。12時間以上居るのが常態化している。こんな教員の仕事ぶりを、起業して社長をしている大学の友人に話したら、「仕事にボランティアはないと思うよ」とたしなめられた。ボランティアという意識もなく半日以上学校に居る、仕事をしていることは、やはり常識ではない異常なことだと認識すべきなのだろう。

近年、深刻な長時間労働の実態がようやく世間にも認知されるようになってきた。勤務実態調査は、2006年にも実施された。給特法に基づく教職員調整額4%の存廃が議論の中心であったが、結局残業相当時間が平均40時間を超え、見直しには膨大な財源が必要になることから、議論は立ち消えになってしまった。

それが今、政策課題だとして「働き方改革」が

浮上し、再び教員の勤務実態調査が行われた。その結果、中学校教員の約6割が月80時間を超えて残業する「過労死ライン」を上回るという深刻な実態が明らかになった。学校では、今更の認識であったが、中教審に「働き方改革特別部会」が設置され、緊急提言が出されるようになり、本腰が入り始めたのは頼もしい限りである。

肥大化した学校（教師）の仕事をスクラップする提案がなされている。これまで「教師としての専門性を高めるよりもむしろ職務範囲を拡げること、保護者や地域の信頼を得るように努めてきた。」と指摘する学者もいる。そういえば、学校・家庭・地域の役割分担と連携が語られてきたが、私の教職年数が増えるにつれ、家庭・地域の役割が小さくなり、その分学校にその役割を背負わされてきた感が否めない。

ビルド、ビルドできた分掌を「そぎ落とす」提案の中身が見えてきたが、中教審の提言では、中身よりも「学校において、勤務時間を意識した働き方を進めること」を第一義とした。勤務時間を抑制する形式的な策は、これまで多くの教員が行ってきた、持ち帰り仕事が増大するだけで、何も変わらない。

生徒が居る間は休憩時間もないに等しい学校における仕事ぶり、過労死を心配するのであれば、小手先の働き方改革ではなく、学校の役割を抜本的に変革することが必要だと、強く思う。

「言うは易く行うは難し」であることはわかるが、採用試験の志願者が激減している現在、少子化で教員定数が自然減するのはやむを得ないとしても、今後の有能な教員確保の点からも深刻な問題である。

さて、私は来年度の教育課程編成会議の冒頭、基本方針の中に「“やめる、減らす、変える”で働き方を見直す」を改善の視点として教育課程編成を行う、ことにした。何がスクラップできて、働き方の改善につながるのか、乞うご期待ください。

平成29年度

県中学校長会の歩みと成果

事務局長 伊藤 隆幸
(福島市立福島第一中学校)

東日本大震災及び原子力発電所事故からまる7年が経過しました。校長会では「学校は、復興のシンボルであり、復興の活力源である」ことを肝に銘じ、学校経営

の最高責任者としてのリーダーシップを発揮し、教育課程の編成・実施と教育環境の整備を図りながら、子供たちに「生き抜く力」を身に付けていくことを目指しました。

各専門部におきましては、各専門部会長、各支会専門部会長、そして、各専門部幹事のご尽力によりまして、充実した活動が展開され、大きな成果を収めることができました。

〈専門部会の活動概要〉

(1) 行財政部会

「大震災・原発事故の影響に係る調査」を含む当面する重要課題について調査研究を行い、集計・分析の結果を基に、県人事委員会、県議会各派及び各市町村長と市町村教育長への要望活動を実施しました。

(2) 研究部会

平成27年度からの全日中の研究主題に基づき第3年次の研究を推進し、その成果とともに各支会の研究の成果を研究集録として刊行しました。

(3) 進路指導部会

進路指導に関しての各調査を実施し、各学校に情報提供を行いました。また、「進路動向調査」を実施し、全県的な進路希望状況の把握を行いました。

(4) 生徒指導部会

「震災後の生徒指導上の諸問題に関する調査」等を実施し、分析・考察の結果を各学校に情報提供することによって生徒指導の充実を図りました。

(5) 広報部会

中学校長会ホームページの管理・運営とともに、会報を発行し、本会の組織・運営、事業内容、活動状況等について、広く情報を発信しま

した。

また、本年度は中学校教育70年の節目の年に当たり、「中学校教育70年記念第68回全日本中学校長会東京大会」が開かれました。式典後には、皇太子同妃両殿下より、被災三県の会長に対し、労いと励ましのお言葉を頂きました。

さらに、昨年度から準備を進めてきました「福島県中学校70年史」を9月に刊行することができました。

福島県中学校70年史の
刊行にあたって中学校70年史刊行委員長 小針 伸一
(福島市立福島第二中学校)

県の中学校教育を振り返るとき、新制中学校発足後5周年を記念して刊行された「中学校のあゆみ」、そして県教委が中心となり校長会が協力して刊行された「福島県中学校十年史」があります。その後の記録は、

県中学校長会により、「福島県中学校二十年史」、「三十年史」…と、10年ごとに記録遺産である記念誌が刊行されています。

昨年度、校長会事務局にあつては、次年度70年の節目を迎えるにあたって、先輩校長の思いを引き継ぎ、過去と未来をつなぐ記念誌を刊行しなければとの強い思いから、この10年の記録に重きを置いた70年史の刊行を計画し、早速、編集・執筆の作業に入りました。お陰様で、本年9月無事完成を見ることができたわけであります。これまでの記念誌同様、今後の県中学校教育の充実・発展の一助となればと願っているところあります。

本誌刊行のために玉稿をお寄せいただきました関係の皆様、そして昨年度末を持って退職されました先輩諸氏を含めました編集執筆委員、支会編集協力者の皆様に心から感謝申し上げます。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、教育行政上の課題解決に向けて組織的な対策活動に取り組みました。

調査内容については、調査項目を検討し要望活動に反映できるように整理統合しました。特別調査については、震災後6年以上経過したものの、対応すべき課題が多くあるので継続して実施しました。

1 活動の重点

- 当面する重要課題の調査研究と課題解決
- 教育諸条件の整備・充実
- 教職員の待遇改善

2 調査研究活動

- (1) 調査Ⅰ：教職員配置等に関する調査
- (2) 調査Ⅲ：教育施策の実施状況調査
- (3) 特別調査：大震災・原発事故の影響に係る調査

3 要望活動

小・中の齋藤会長、福地会長を中心とする要望団を組織し、9月に要望活動を行いました。その際、加配教員の増員やSC及びSSWrの拡大配置の必要性等、活動の重点、調査結果のまとめをもとに要望活動を行いました。(要望書参照)

- (1) 面談（要望内容説明）
 - ① 福島県人事委員会
 - ② 県議会議員政党等
- (2) 要望書届け
 - ① 福島県市長会、町村長会
 - ② 福島県町村議会議長会、市議会議長会
 - ③ 市町村教育委員会、都市教育長会、町村教育長会の代表機関等
- (3) 主な要望事項
 - ① 教職員の加配について
 - ② SC及びSSWrの拡大配置について
 - ③ 学級編制基準や教職員定数改善について
 - ④ 人材確保のための処遇改善について

4 教育懇談等

関係機関と教育懇談を行い現状説明等を行いました。

- (1) 福島県公立学校退職校長会（7月14日）
- (2) 福島県教育庁関係者（8月17日）

（行財政部会長 神野 興）

● 研究部会 ●

1 共通理解に基づく共同研究の推進

研究主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を指標とした8小主題について、「研究の手引き」を活用するとともに2年間の研究を踏まえ、第3年次の研究を各支会・各学校の実態に即して推進しました。

第45回福島県中学校長会研究協議会を各支会ごとに開催し、小主題毎の8分科会を設け、発表と協議を通し、研究の深化を図るとともに、その成果を共有しました。

2 研究集録の編集及び「研究の手引き」の作成

研究主題に基づく調査研究の充実、資料や情報の提供を目的とし、各支会における3年次研究の取組や成果を収めた「研究集録」を刊行し、全会員に配付する中でその成果を共有することができました。

平成30年度からの主題に基づく3年次研究の「研究の手引き」を作成し、次年度からの研究の推進について発信することができました。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

中学校教育70年記念第68回全日中東京大会に参加し、研究主題にかかる研究の方向性や他県の研究の動向等の情報収集に当たるとともに、8小主題における研究発表の内容等について、情報交換することができました。

東北地区中岩手大会において、第2分科会(教育課程)で耶麻支会が研究の成果を発表し、それをもとに有意義な研究協議が進められました。

4 原発事故に関わり、学校教育が向き合った課題、対応等の発信

震災後7年を経過した福島の現状を記録し累積するために、研究集録の中に、「ふくしまの今」～双葉支会の現状～を継続して掲載し、双葉支会の抱える課題等を全会員で共有しました。

（研究部会長 安斎 康仁）

● 進路指導部会 ●

本部会では、①「生き抜く力」をはぐくむキャリア教育の視点にたった進路指導の充実、②高等学校入学選抜方法等の改善に向けた高等学校や関係機関との連携、③適正な進路指導充実のための諸調査の実施と情報提供の方針のもと活動してきました。

主な活動の概要は、以下のとおりです。

1 「生き抜く力」をはぐくむキャリア教育の視点にたった進路指導の充実

各支会において、キャリア教育の視点を重視し、地域の実情を生かした進路指導の推進を図るとともに、部会長会においては、協議・情報交換を通して進路指導の体制や内容の改善・充実を図りました。

2 高等学校入学選抜方法改善への対応と連携

「進路指導に関する調査」の集計結果をもとに、県立高等学校入学選抜事務調整会議において、提案された改善事項について意見を述べました。また、平成32年度にスタートする新たな入学選抜制度についても、原案に対して中学校長会の立場から意見を述べました。

福島県中学校長会進路指導部のホームページに掲載している「調査書記入用略称一覧」について、変更点や加筆した内容を色分けする等の改善を加え、より利用しやすくしました。

3 「中学生活と進路」＜福島県版＞の編集

副読本「中学生活と進路」の部分改訂にあたり、全国版と県版の内容の整合性を図るとともに、生徒の実態や生徒を取り巻く環境の変化、本県の状況に応じた内容となるよう検討を加えました。また、写真やイラスト、図版、統計資料を最新のものに差し替えるとともに、1・2年では、新たな入学選抜制度について調べるページを作成しました。

4 進路指導に関する諸調査の実施

全県一斉の「進路希望動向調査」を年間2回実施し、福島県中学校長会進路指導部のホームページに掲載して活用を図りました。また、平成29年度末「進路指導に関する調査」の内容を32年度の入学選抜制度改訂を視野に入れ、実態に合わせて大幅に改訂しました。

(進路指導部会長 西牧 伸弘)

● 生徒指導部会 ●

1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした集団づくり

各支会における生徒指導主事協議会や学警連定例会等を通して、現状や対応策を協議することにより、生徒指導の推進役となるリーダーとしての意識と指導スキルの向上に努めました。

また、今年度は被災7年目に当たり、引き続き配慮を要する生徒に対して、各学校において心のケアに努めました。

2 震災、原発事故等にかかわる課題と当面する諸課題の把握、その解決や未然防止

教育相談体制については、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等、専門スタッフの人員配置や勤務時間等の増加を教育委員会へ今後も働きかける必要があります。また、反社会的行動は減少したものの、不登校の発生は歯止めがかけられませんでした。本年度から実施したいじめ調査に関しては、今後も継続し、推移を見守るとともに、根絶に向けての支援体制を確立していきたいと考えます。

「インターネット等利用に関する生徒へのアンケート」では、小学校と同じ項目で実施することができました。今後も実態を把握したうえで、ネット端末利用改善に関する共通実践の必要性を示すデータを提供するなど、啓発活動の充実に努めていきます。

また、児童生徒の虐待に関する問題について、小学校長会生徒指導部と合同で児童養護施設の担当者を講師に講演会を開催し、現状理解と教育現場と関係機関との連携の在り方等について一層理解を深め、その対応について考えることができました。

3 小学校及び高等学校、関係機関等との連携

小学校、地域、関係団体との連携が更に進められ、一貫性のある基本的な生活習慣づくりに効果をあげています。また、小・中の連携は年々強化されるとともに、広域的な問題等において、中・高の連携を図る新たな指導体制が進んでいます。

4 生徒手帳の編集、刊行

編集委員を中心に改訂を行い、編集、刊行することができました。

(生徒指導部会長 渡辺 康弘)

● 広報部会 ●

今年度も7月と3月に広報誌「福島県中学校長会広報」を発行し、本会や各支会の活動紹介及び関係団体等の活動概要の報告を行いました。また、福島県中学校70年史の編集に協力させていただきました。

この広報誌は平成25年度より中学校長会のホームページ上での掲載になりましたが、会員への配付時期や方法等を工夫し、紙媒体での配付も検討していきたいと思えます。

ホームページの更新と維持・管理を行い、適切な運用を図りました。

【会報の主な編集内容】

1 第158号（7月1日発行）

- 会長あいさつ（福地憲司会長）
- 県中学校長会総会の概要及び組織
- 学校教育の今日的課題（折笠文昭副会長）
- 県中学校長会の活動と運営
（伊藤隆行事務局長）
- 各専門部活動の概要（各専門部会長）
- 第68回全日中総会の概要
- 支会情報と特色ある学校経営
伊達・福島・東西しらかわ・北会津
- 新会員紹介及び新会員の声
- 随想（高橋卓夫副会長）

2 第159号（3月1日発行）

- 平成29年度を振り返って（福地憲司会長）
- 学校教育の今日的課題（飯村新市副会長）
- 平成29年度県中学校長会の歩みと成果
（伊藤隆行事務局長）
- 専門部活動の概要（各専門部会長）
- 県小中学校長会理事会・中学校長会理事会報告
- 平成30年度主要行事（県・東北・全日中）
- 支会情報と特色ある学校経営
安達・田村・両沼・相馬
- 随想（寺木誠伸副会長）

（広報部会長 塚野 薫）

● 小・中学校合同理事会報告 ●

本年度最後の小・中学校合同理事会が2月20日(火)に飯坂あづま荘で開催されました。

※ 議長：岡崎一也（小） 山野辺藤夫（中） 常任理事

【報告】

- 1 平成29年度退職役員感謝状贈呈式の件
- 2 平成29年度退職役員感謝会の件

【協議】

- 1 平成30年度県小・中学校長会合同開会式並びに小中理事会、総会の運営について
 - 期日：平成30年4月25日(水)
 - 会場：福島県教育会館
 - 2 平成30年度主要行事について
 - 3 平成30年度教職員人事の反省について
 - 4 平成30年度行財政部（会）の調査について
- ※ 上記案件について提案の通り承認されました。
- ◇ 退職役員感謝状贈呈式
退職役員は、小学校31名、中学校15名で、遠藤和雄小学校長会長代行、高橋卓夫中学校長会長代行より感謝状が手渡されました。

● 中学校理事会報告 ●

第5回中学校長会理事会は、2月20日(火)・21日(水)の両日にわたり、飯坂あづま荘で開催されました。

【報告】

- 1 全日中理事会の件
- 2 平成29年度会務・会議報告の件
- 3 県中学校長会共催、後援承認行事の件

【協議】

- 1 平成29年事業報告について
 - 2 平成29年度会計執行状況について
 - 3 平成29年度関係団体との連携について
 - 4 平成30年度事業計画（案）について
 - 5 平成30年度行事予定（案）について
 - 6 平成30年度第1回理事会の運営について
 - 7 平成30年度第68回総会の運営について
 - 8 県研究協議会県中県南大会・福島県中学校教育70年記念式典について
- ※ 上記案件について、提案の通り了承されました。

第68回全日本中学校長会東京大会 「中学校教育70周年記念式典」

10月18日(水)～20日(金)の3日間にわたり、「第68回全日本中学校長会東京大会」が開催されました。その一環として、19日の午前には東京国際フォーラムにおいて、「中学校教育70周年記念式典」が挙行されました。式典は、1947年4月の学校教育法施行によって現在の中学校制度が発足してから70年を迎えたことを記念するもので、全国の校長ら約3800人が参加しました。福島県からも66名の出席がありました。

直田益明全日中会長は式辞の中で、現在の中学校教育における様々な改革、新たな制度の構築や新学習指導要領への対応、いじめ防止などに触れるとともに、中学校教育の質が、今後の日本の在り方を左右するものであるとして、その重要性を強調されました。

つづいて、林芳正文部科学大臣があいさつされました。将来の変化を予測するのが困難な時代をたくましく生きていくことが重要である。政府としても、学習指導要領の改訂や教員の業務負担軽減など、さまざまな施策の取組みを進め、子供たちの確かな学力、豊かな心、健やかな体の育成に努めていると述べられました。

式典には、皇太子徳仁親王様、皇太子徳仁親王妃雅子様のご臨席を賜りました。これまでの中学校教育が戦後の復興と社会の発展に大きく寄与したこと、また、義務教育の最後の段階として、将来を担う子供たちが社会で自立して生きていく基礎を培う大切な時期に行われるものであることを述べられました。さらに、中学校教育に携わる皆さんが、国民の期待に応えていることを願うというお祝いのお言葉をいただきました。また、功労者607人に対して、直田会長から感謝状が贈呈されました。

式典終了後には、別室において、東日本大震災被災3県の会長が、皇太子ご夫妻とのご接見の機会をいただきました。

午後に行われた全体協議会では北海道浦河町立浦河第一中学校の神成浩校長と徳島県鳴門教育大学附属中学校の野々村拓也校長がそれぞれ実践発表を行いました。

北海道の神成校長は、職場体験や他の学校種との連携、地域社会とのふれあいを通じたキャリア教育の実践を紹介されました。管内の中学校の一連の取り組みを通じて、生徒の意識に変化が見られるようになり、中学校卒業後の管内進学率や管内高校の大学進学率は増加傾向に転じたとのことでした。

徳島県の野々村校長は、学校評価の仕組みを見直し、日常的な点検や改善、教員の参加意識向上につながる取り組みを報告されました。取り組みのポイントとして、教員評価の結果をいかに学校評価に結びつけ改善できるかを考え、教員の自己評価が全員B以上になることを学校目標として位置づけたとのことでした。それにより、教員による点検や改善の意識を高め、組織的改善につながるようにすることが大切であると報告されました。

20日(金)には、文部科学省初等中等教育局白間竜一郎審議官より初等中等教育上の諸課題についての文部科学省説明が行われました。全体協議会では、大会宣言・決議がされ、つづいて、ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智理学博士による記念講演が開催されました。

大村先生は、東京都立墨田工業高等学校定時制で理科教員として教壇に立たれました。昼に働き、夜に学ぶ生徒の姿に感動し、ご自身も学びなおし、研究者への道を進まれたとのことでした。研究者の喜びや苦しさ、祖母、母の教えのお話とともに、ご年齢を感じさせない若々しさが印象に残りました。



支会情報と特色ある経営

安達

安達支会の活動



安達支会長 佐原 聡
(二本松市立二本松第一中学校)

安達支会は、二本松市、本宮市、大玉村の11校の中学校長で構成されています。今年度は、7名が新会員であり、3名は市内での異動、1名のみが異動なしという状況で、組織も大幅に変わりました。先輩から受け継いできた「安達は一つ」というスローガンの下、会員相互の連携を図りながら、地域の実情に応じた特色ある学校経営の充実に寄与できるよう取り組んでいます。

また、安達地区小中学校長会協議会の組織を活用して、小学校長との連携も進めています。

1 定例校長会の開催（含む研修会）

各学校の具体的な状況などについて情報交換を行うとともに、県理事会や各専門部の活動報告を踏まえて、安達地区の中学校の課題と改善策等を協議し、各校の経営に生かしています。

「時代の要請に応える学校経営の充実」のテーマに沿い、各校の実践を研究部でまとめ、3年間の研究の成果を共有しました。

2 退職校長会との連携

退職校長会の皆様と現職校長会の会員が、それぞれから提供された話題について懇談した後、懇親会で和やかに語り合いました。

3 安達地区中学校高等学校長協議会の開催

地区内高等学校長4名と中学校長11名で、各学校の課題等について情報交換を行いました。各高校の情報が得られ有意義な会となりました。

4 安達地区小中学校長会協議会

役員会において、小中学校それぞれの課題や小中連携などについて情報交換を行ったり、総会や懇談会等で小中全校の校長が一堂に会して懇談したりして、自校の運営に役立っています。

その他、中体連・中教研など地区内各種団体の行事に際して、「地区内中学校全体の充実・発展」という視点を押さえながら校長会としてのかかわりを進めています。

《学校紹介》

地域と共に歩む学校づくり

大玉村立大玉中学校

本校は、西に安達太良山、東は阿武隈川に接する、自然環境が豊かな地域に位置し、村唯一の中学校として教育活動を行っています。小さいというスケールメリットを生かし、村民一人一人がつながり、共に支え合い、学び合って、夢や生きがいのもてる豊かな人生を送ることができるよう、おおたま学園コミュニティ・スクール構想を基本に、学校・家庭・地域が協働しながら、地域と共に歩む学校づくりを推進しています。

本校では、地域と共に歩む学校づくり、さらに幼小中連携の推進という視点から、オープンスクールの実施や学校支援ボランティア等の積極的な活用を図っていますが、特色ある経営実践の一つに、おおたま・オータム・フェスタがあります。コミュニティ・スクール委員からの提言を受け実現した活動で、学校間・世代間交流の促進、村全体の一体感や連携・協働意識の醸成を図ることを目的として実施しています。中学生は、小学生と一緒に、あだたら登山やスコアオリエンテーリング、アートフィールドワークを行いました。異年齢交流や村民との交流は、社会性や人間性、さらに郷土愛を育むことにもつながり、村内を主とした様々な団体、多くの方々から協力をいただき、毎年大きな成果をあげています。



小学4年生と中学1年生合同の安達太良山登山

生徒の中には、「村の一番の魅力は地域の方々」と話す子もおり、その地域の方々の学校支援により充実した教育活動が展開できています。今後も、地域との連携・協働体制をより強化することで、地域と共に歩む学校づくり、そして学校を核とした地域づくりに努めていきたいと思えます。

(校長 鈴木 豊)

田村

田村支会情報

田村支会長 高橋 秀章
(田村市立船引中学校)



田村支会は、田村市・小野町・三春町の1市2町の中学校10校で組織されています。また、今年度は、転入1名、新任4名を新しいメンバーとして迎え、半数の校長が入れ替わった状況下でのスタートとなりました。校長会として、本会、中教研、中体連、各種団体等の組織づくり、そして、それぞれの組織での運営面等、様々な課題を抱えながらも、まずはそれぞれの校長が新鮮な感覚で学校経営にあたるとともに、積極的に校長会の運営に参画して頂いております。そして、先を見据え、「変えるべきところは変える」を合い言葉として取り組んでいます。

組織が小さくなりデメリットは生じていますが、小さくなったことでのメリットを活かし、5年前に立ち上げた「田村支部中学校長会教育懇談会」を有効に活用しています。この懇談会は、年に数回勤務時間外に開催し、校長個々が抱えている問題や悩み等を語り合い、改善策を模索し、一人で抱えることなく、組織として連携・協力できるようにすることを目的としています。肩肘を張らず参加できる会を目指し、情報や想いを共有しながら、校長間の人間関係作りと新任校長等が地域や校長職を理解できる場として良い研修の場となっています。

本支部では、このような機会を持ちながら、本年度も学力向上や多くの課題解決に向け、まずは校長会が一枚岩になり、校長会と各校の学校経営の充実に努力して参りました。また、次年度は田村市の2つの中学校の統合により、さらに1校減少し9校の組織となります。校長の大量退職時代も見据え、校長会のあり方について時代の要請に即した活動ができるように組織の見直しと活動のあり方について、今後も田村の子供たちのために、一層充実した実践ができるよう一人一人が知恵を出し合い、協力し努力していききたいと思います。

《学校紹介》

最後まで一丸となって

田村市立移中学校

本校は、田村市北部、葛尾村と浪江町に隣接する地区にある山あいの中学校です。平成26年度末の生徒数は52名でしたが、毎年ほぼ10名ずつ減少し、本年度は23名となりました。

少人数となった今年度、これまでの教育課題に加え、駅伝競走大会や地区音楽祭などの対外行事への参加の在り方、校内文化祭などの校内行事への取り組み方などを新たな課題として捉え、できるだけ全校生で取り組んでみようという方針で教育活動をスタートさせました。

私たち教職員と同じように危機感を持った生徒会は、『「We are made up of challenges.」僕らは挑戦からできている』を活動のテーマとし、困難に立ち向かう姿勢を示してくれました。

夏季休業を前に、船引中への統合の計画が持ち上がりましたが、生徒たちは動揺・停滞することなく、全校をあげて、学習などの通常の活動、そして部活動、合唱練習、駅伝練習に取り組みました。その陰で過重な負担とならないよう担当各職員の調整があったのはもちろんのことです。

夏休みを経て、生徒はたくましさと自信を身につけることができました。全校生で参加した地区音楽祭など様々な大会で成果を発表・披露することもできました。また、校内文化祭での全校生によるダンス披露などで、常に『挑戦』を忘れずに活動する姿を保護者・地域の方々に発信してきました。

昨秋、本年度末での閉校が正式に決定しました。波乱に富んだ1年でしたが、移中学校に誇りを持って『挑戦者』であろうと頑張っている生徒を、全職員で最後まで応援していききたいと思います。



(校長 橋本 誉弘)

両 沼

両沼支会の現状と課題



両沼支会長 井上 佳彦
(柳津町立柳津中学校)

両沼支会は、会津坂下町、湯川村、柳津町、会津美里町、三島町、金山町、昭和村の計10校で組織されています。広範囲のため、支会

校長会の開催会場は、各町村輪番制で行っています。以下、本支会の現状と課題及び対策について報告します。

1 少子化問題と中体連総合大会

本支会の最大の課題は、何といたっても「少子化問題」です。10校の中学校すべてで、ここ5年間生徒数が減少し、減少率は13%にも及びます。そのため、各校とも部活動数が減少し、そのことによって中体連総合大会での試合数も減り、大会としての体をなさなくなっている種目もでてきました。今後は、他支会との合同開催も視野に入れて実施していくことを検討しています。

2 中教研第一次研究協議会の運営

少子化の影響は、学級減から教員数の減少にもつながっています。そのため、中教研において、人数の少ない部会（音楽、美術、技術・家庭、道徳、特活）については、耶麻支会との合同開催を実施しており、さらに全体会を割愛して、開会式・閉会式とも専門部会ごとに行っています。また、猛暑を避けて快適に研修を行ってもらうために、冷房設備のある部屋を確保しています。

3 全日中・東北中研究大会派遣費の補助

4月の支会総会で参加者を決めるのですが、全日中大会は、会長参加を基本とし、派遣費は全額両沼支会の予算に組んであります。課題は、東北大会への参加者です。公共交通機関を利用すると参加者の自己負担が過大になってしまいます。そこで、本支会では、「一般会計より支出するが、必要経費がそれよりも超過した場合には、超過分を参加者に立て替えておいてもらい、12月に会員全員から臨時徴収して、追加派遣費とする。」という申し合わせをしています。ご参考まで…

《学校紹介》

起業家スピリッツ確立を目指して

柳津町立西山中学校

西山中学校では、アントレプレナーシップ育成教育（起業家教育）に取り組んでおり、地域の風習をモチーフにして生徒が開発した「ひストラップ」が地元の温泉土産として好評です。これらを運営しているのが起業家スピリッツ確立のために設立した模擬会社「西中ほのぼの夢工房」です。

設立にあたっては、実際に企業再生に携わった銀行の方に会社組織について学び、運転資金を出資し合って設立しました。

「西中ほのぼの夢工房」は、大きく企画、宣伝、制作、販売部門に分かれ、それぞれの部門が利益追求のために知恵を絞ります。少人数ながら、その活発な議論は、一般の会社の企画会議を彷彿させるものがあります。ねらいとした、問題発見能力、企画力、リサーチ力、プレゼンテーション能力など、さまざまな力が着実に育っていると感じることができます。これらの活動が展開できたのも、地域の方々のご理解とご協力があったること。あらためて「地域に支えられた学校」という思いを強くしました。



地区の行事での販売活動

過疎・高齢化という地域の問題に「起業家スピリッツの育成」という切り口で活動してきた西山中学校ですが、今年度末には閉校となります。

生徒たちには本校での活動をよりどころとして、地域に産業を興し、地域を活性化させる人材となってほしいと願っています。

(校長 高橋 弘悦)

相馬

相馬支会情報



相馬支会長 山野辺藤夫
(相馬市立中村第一中学校)

東日本大震災及び原子力発電所事故から6年が経過し、相馬地方の教育環境も少しずつ復旧復興してまいりました。平成29年4月、

避難先の仮設校舎で教育活動を行ってきた南相馬市立小高中学校が小高区に戻り本校舎で教育活動を実施できるようになりました。また、県立小高工業高等学校と小高商業高等学校が統合され、小高産業技術高等学校が新設されました。平成30年4月には飯館村立飯館中学校が飯館村に戻り再開する予定です。反面、残念なことに平成28年度末に相馬市立玉野中学校が閉校となりました。県内外の会合や大会等に出席した際に「相双から区域外就学している生徒が、しっかり頑張っていますよ」「運動部活動の県大会で活躍している生徒は双葉郡の生徒ですよ」と知り合いの校長先生から声をかけられます。生活環境が大きく変化し、何かしら悩みや不安を抱えている避難した相双の子供たちがしっかりと頑張っていることを嬉しく思うとともに、それを支えていただいている関係学校の校長先生や先生方に謝意を表したいと思えます。

このような状況のもと、相馬支会は今春、1名が退職、2名の転入会員を迎え、28年度から1名減の12名で29年度をスタートさせました。本会の中心として、小中連携としての相馬地方小中学校長協議会、中高連携としての相双中高校長連絡協議会を通してこれまでの課題や新学習指導要領、教職員の多忙化解消・働き方改革等、新たな課題について意見を交換し、課題解決に取り組んでいます。

校長会は、校長一人一人が自分の考えを腹藏なく話し合える会であり、必要があれば校長全員の意思として外に向かって主張する勇気を持たなければならないと考えます。校長会が最高の知性集団、職能集団であるという自負をもって結束し、相馬地方の中学校教育の充実と発展に寄与したいと思えます。

《学校紹介》

石神の絆

南相馬市立石神中学校

～思えば昔聖人の 教をたれしこの里は 報徳のいさおとこしえに みずほの秋をたたえしむ～

これは昭和27年より歌い継がれている本校校歌の一節です。儀式や集会時に体育館に響き渡る歌声、交わされる元気な挨拶、学習への真剣な眼差し、清掃や委員会活動、部活動で流す汗、共に伸びようとする心など、生徒たちの生活の様子から、ここ石神地区には報徳仕法が脈々と受け継がれていることが伺い知れます。

さて、本校は今年度より3年間、福島県教育委員会の「学びのスタンダード推進事業」のパイロット校として、石神第一小学校、石神第二小学校と共に石神地区の児童生徒の学力向上、教職員の指導力向上、家庭・地域の教育力の向上をめざし研究を進めています。今年度は「主体的・対話的な学習を通して児童生徒が相互に啓発し合える授業の実践」をテーマに、相双教育事務所、南相馬市教育委員会よりご指導をいただき、話し合い活動における思考ツールの活用を共通の視点に、子供たちの深い学びの創造を目指し授業改善を進めています。同時に教師自身もアクティブラーナーになるべくワークショップ型の研究協議を積極的にを行い、身をもって主体的・対話的な学びを実践しています。今年度は、6月と11月、2度の授業公開を行い、多くの先生方に貴重なご意見・ご助言をいただきました。これを励みに今後さらに研究の充実を図りたいと考えています。

また、来年度は姉妹校英国ロセット校との相互訪問交流事業を予定しています。震災後も途絶えることなく30年にわたり石神の子供たちのために継続されている事業です。これら「石神の絆」を胸に教育活動を進めてまいりたいと思えます。



(校長 高橋 知宏)

県中学校長会の会報に「随想」を書かせてもらえるなんて夢にも思わない教員生活でした。38年中16年も生徒のいない場所での勤務でしたが、生徒と一緒に時の中身はとて濃いものでした。

昭和55年豪雪の年が南会津郡伊南中学校に着任した年でした。会津で生まれ育ちながら、雪が降り続くことの恐怖を初めて味わいました。英語教員でありながら、英語の授業は週にわずか3時間だけ、全学年の技術科と文部省指定の格技研究発表のための体育のTT、全校生木刀体操が私の担当でした。スキー部顧問として、冬は昼休みに村のスキー場に行って、ポールを担いで斜面のところどころに置いてくるのが日課でした。

次の喜多方三中では剣道部の他に駅伝部の正顧問として「自分は汗をかかないけども生徒には苦しいほど汗をかかせること」を覚えました。耶麻地区3連覇、県大会は2年目8位、3年目7位。6位に入賞させる力のないため監督でした。その頃、不登校生徒の家を家庭訪問した時のことです。両親は病気がちで働けず、貧しい家庭でした。ほとんど話をしないおとなしい生徒、両親、私がこたつのそれぞれの辺に座り、出口が全く見えない閉そく感の中で沈黙していました。手を付けずに置いた湯飲み茶碗を見ていた時に、天井からスーッと蜘蛛が下りてきました。そしてまっすぐに私の茶碗に入水。「先生、きれいな茶碗でなくてもうしわけありません」とお母さんの一言。だれも蜘蛛に気が付いていません。「蜘蛛が入ったことを申し出ればきっと家族の皆さんは、建物の古さと不清潔さを気にしてしまう。飲むしかない」。熱くもないお茶を冷ますふりをして、表面に浮かんでいる蜘蛛を反対の縁に吹き飛ばし、蜘蛛の出汁の効いたお茶を一気に飲み干しました。その時に生徒がにこっと笑ってくれたのです。初めて見た笑顔かもしれせん。私はその帰り道、なんとなく「先生になった～」という気がしました。

次は、高田一中でした。鍛えれば鍛えるほど伸びていく生徒たちの高い資質に驚かされた2年間でした。喜多方三中、高田一中両校で、中教研県大会の授業を公開するチャンスに恵まれ、そこから長期研究員として教育センターへ。学習指導要領を初めて隅から隅まで読み通しました。宿泊担当の日、ALTたちが真夜中まで帰所せず、12時過

ぎに校長先生宅に電話を掛けたこともありました。それから河東中へ。河東中学校では、落ち着いた雰囲気の中で英語の授業づくりに最も真剣に取り組みました。駅伝部女子顧問として結局は2年連続県8位どまり。そして、管理職試験へ挑戦！なぜか市教委への赴任でした。公金の仕組みに全く無知だった私は、学校のすべてのお金は公金であり、すべてが税金であることの重さを味わわれました。2年で、生徒数700名の一箕中へ教頭として着任しました。きっと教頭がふたりになるのだろうと安心していたら私ひとり。特別元気な？生徒も多く、毎日がスリリングでとても刺激的でした。ただ、そのような環境であれば教職員が一致団結します。やりがいのある3年間でした。

それからまた、市教委へ戻りました。しかも私が事務を引き継いだ指導主事から同じ引継ぎ簿を受け取りました。つまり、全く同じ席に戻ったのです。市教委始まって以来と笑話になり、市役所仲間と宴会になりました。3年目には、小泉構造改革特区制度に会津若松市が手を挙げ、なんと小学校英語科がスタートすることに。担当の私は、強烈な抵抗の中で3校に無理やり英語科を設置し、外国人アシスタントを派遣し、指導用テキストを作成しました。私の38

年間の教員生活で最も追い詰められた最大の危機でした。4年間の任期を何とか終えることができ、三島中学校長として着任しました。小さな中学校でしたが、毎朝の全校マラソン、男声合唱がアンコンで金賞受賞など、生徒と一緒に数多くの活動を楽しみました。古くから伝わる伝統行事に触れて日本人の文化について考えるチャンスになりました。平和な教員生活もわずかでした。それから管理主事という特殊な世界に投げ込まれ、所長まで経験させてもらいました。地位は上がり給料は下がり続けるという絶妙なバランスの中で、恥を重ねながら何とか乗り切り、最後に本校に着任しました。

いろいろな席に座りながらいつも思っていたことは、「この席で寺木は～をした」と言われるプライドを持って働くことでした。評価は、一緒に勤務した皆さんの心の中にあります。その心の声は聴かない方が無難なのは十分自覚しています。

拙い文をお読みいただきありがとうございます。県内の校長先生方、教職員の皆様にご心から感謝し、お礼の言葉に替えさせていただきます。

随想



福島県中学校長会副会長
寺木 誠 伸
(会津若松市立第四中学校)

その席で何をしたか